

Literary prizes in prewar Sunday Mainichi

IZUMI Tsukasa

Abstract

This paper discusses the literary prizes offered by the weekly magazine Sunday Mainichi.

Sunday Mainichi has conducted many literary prizes in the past. This paper analyzes the Sunday Mainichi's call for popular literature, which ran from 1926 to 1952, and the first Chiba Kameo Prize.

The Call for Popular Literature has produced some of the most famous writers of all time. It is extremely valuable. However, it was a place of practice. The Kameo Chiba Prize was created by Sunday Mainichi with the aim of becoming a full-fledged literary prize, but it did not work out.

Running a literary award is very difficult. However, people always want a literary award event. It is important to think about the mechanism.

戦前期『サンデー毎日』の賞イベント ——『『サンデー毎日』大衆文芸募集』と第一回千葉亀雄賞を中心に

和 泉 司

はじめに

1922年4月、大阪毎日新聞社が週刊雑誌を創刊した。『サンデー毎日』である。2022年現在も発行を続けている日本で最も有名な週刊誌のひとつとって間違いのないこの雑誌は、創刊後まもなく、当時の表現で言えば「読物」「講談」をメインコンテンツに据えるようになり、それによって大きく売り上げを伸ばした。後に「大衆文学」「大衆文芸」と呼ばれるテキスト群である。

『サンデー毎日』が大衆文芸¹をメインコンテンツに据え、連載小説を巻頭に配置するようになったのは、創刊後売れ行きが低迷していた期間、その中でも販売部数が多かったのが「小説と講談」の特別号であったからだという。²『サンデー毎日』1924年5月25日号に連載が開始された、白井喬二「新撰組」がその嚆矢であり、好評を博した同小説は翌年6月28日号まで一年以上、五十六回に渡って連載された。³この1924年の年末には、大日本雄弁会講談社より月刊誌『キング』が創刊されている。つまりこの時期は、当時の日本国内における進学率や読書リテラシーの向上が、広く一般大衆の娯楽としての読書欲求を喚起しつつあった時代であり、その欲求と『サンデー毎日』の方針転換は、ちょうど合致したのであった。⁴

これ以降、『サンデー毎日』はまさしく日本における大衆文芸の中心的メディアとなっていく。しかし一方で、いわゆる「純文学」との対比される中で、大衆文芸は文学的テキストとしては軽く見られ、また週刊誌というメディアも「総合誌」や「文芸誌」、さらに親メディアである新聞との比較から「読み捨て」されるものとみなされ、日本の文学への貢献度の高さに対して注目度は低く、また研究も進んでこなかった。⁵

そのような状況にあった『サンデー毎日』及び週刊誌というメディアへの研究であったが、2010年代以降に大きく進展し始める。

まず、近代文学合同研究会によって、『サンデー毎日』のシンポジウムが企画され、その内容は『近代文学合同研究会論集』第11号（2014年11月）の特集「戦前期の週刊誌研究——『サ

ンデー毎日』を中心に」にまとめられた。そしてこのシンポジウムの参加者を中心に、科研費による研究計画「戦前期『サンデー毎日』と大衆文化に関する総合的研究」（研究課題番号：17K02487）が実施され、『サンデー毎日』に関する研究報告と研究論文が数多く発表されるようになった。⁶ その成果から、『サンデー毎日』が大衆文芸の分野はもちろん、さらにはその領域を越えて、日本の現代文学の発展に大きく貢献してきたことがわかってきている。

また、直木賞研究家・川口則弘は運営するサイト上において、その広範な調査と直木賞を中心とした大衆文芸に関する深い造詣をもって『サンデー毎日』が大衆文芸の発展に果たした役割についても繰り返し評論にまとめ発表している。⁷ 川口の様々な角度・側面から大衆文芸を見つめ、考察する評論から得られる知見は、大衆文芸のみならず、近代以降の日本の文化とメディアについて研究する上で非常に重要なものとなっている。

このような先行研究の成果を踏まえ、本稿では『サンデー毎日』が大衆文芸をメインコンテンツとしていく中で登場した文学賞企画である「『サンデー毎日』大衆文芸募集」と千葉亀雄賞の登場について論じる。

「『サンデー毎日』大衆文芸募集」は、『サンデー毎日』1926年3月7日号で発表された公募型の大衆文芸テキスト募集企画であり、千葉亀雄賞は『サンデー毎日』1936年1月5日号において創設が発表された大衆文芸を対象とした、やはり公募型の文学賞である。千葉亀雄は「『サンデー毎日』大衆文芸募集」と題された公募型文学賞をほぼ一人で選考していた作家・評論家であり、⁸1935年10月に死去した直後に、その名前をつけた文学賞が新たに設定されたのである。

川口がすでに指摘するように、『サンデー毎日』は大衆文芸をメインコンテンツに据える中で、既存の作家だけでなく、新人発掘にも力を入れていた。1926年に客員として大阪毎日新聞社に入社した千葉亀雄は、前述の通り、入社直前に開始されていた「『サンデー毎日』大衆文芸募集」選考に携わっていた。さらに、1927年に大阪毎日新聞社に入社し1933年から『サンデー毎日』の担当になった辻平一は、初期には千葉を支え、その死後は文学賞企画の中心人物として、『サンデー毎日』の大衆文芸に関するコンテンツを牽引していた。

川口は、この千葉と辻の活躍について、「この二人には共通した特質がありました。すでに名の知れた流行作家や大家ばかりを起用するのではなく、新しい書き手を愛し、我が身を削って新人発掘に賭けたこと。……これに尽きるでしょう。」⁹と述べている。『サンデー毎日』というメディアが大衆文芸を主要コンテンツとし、それを継続し発展させていった千葉と辻が同誌運営に参画していたことが、分野を越えて、日本の文壇に多くの作家を登場させる原動力となった。それだけに、『サンデー毎日』とその文学賞企画は、日本の近現代文学の発展を考える上で重要なのである。

1. 『サンデー毎日』と「大衆文芸募集」

ここからは、具体的に『サンデー毎日』における文学賞企画について見ていくことにする。

前述の通り、千葉亀雄賞創設以前から、『サンデー毎日』では文学賞企画として「『サンデー毎

日』大衆文芸募集」を実施しており、これは『サンデー毎日』1926年3月7日号でその創設が発表されたものだった。野村尚吾によれば、それは次のような企画であった。

この年（1926年——引用者注）の二月に、千葉亀雄が読売新聞社から客員として入社し、六月に学芸部長に就任して『サンデー毎日』の編集にあたることになった。千葉亀雄が『サンデー毎日』に移る三カ月ほど前の3月7日号に「千五百円懸賞、大衆文芸募集」が発表された。

（略）

募集内容は、甲乙の二種で、甲は百枚、乙は五十枚。甲の賞金が五百円、乙が二百五十円で、「翻訳は除く。新講談、探偵小説、通俗小説等構想は随意ですが、サンデー毎日に掲げるものとして、興味本位のを望みます」と、はなはだあっさりとして、すこしも大上段に構えない募集用紙が掲げられている。

ここで注意すべきことは、募集ではいち早く「大衆文芸」の用語を用いながら、本誌では依然「新講談」としている点である。

当時は、一部でようやく「大衆文芸」という言葉が用いられていたけれども、一般にはまだ馴染みが薄かった。そのため「大衆文芸」とは「新しい講談」の文芸ジャンルであることが浸透していないので、読者の戸惑いを予想し、ひいては売れ行きを顧慮して、本誌の小説には従来どおりに「新講談」という用語を使ったのだろう。¹⁰

この後、『サンデー毎日』は「新講談」という表現を慎重に「大衆文芸」に切り替えていったという。「何分にも『サンデー毎日』の眼玉商品だけに変えるとなると、そうとうに慎重な態度をとらねばならなかったのである」。¹¹

1500円というのは賞金総額のことであるが、甲の500円、乙の250円という金額にしても、当時としては非常に大きな金額であった。昭和初年ごろは、旧制の大学卒業者で民間企業に就職した場合の初任給が70円前後だった時代である。¹²この募集企画を『サンデー毎日』は年2回のペースで実施していった。当時の作家志望の青年達の大きな注目を集めたのは間違いなかった。

そもそも、戦前は「文学賞」という言葉は一般的ではなく、これらは「文学懸賞」と呼ばれていた。「懸賞」つまり投稿とは、賞品・賞金を得ることを主目的としたもの、と見なされていたのである。「文学懸賞」は明治時代の新聞企画から登場していたが、¹³このような「文学懸賞」に投稿する行為は端的に「金銭目当て」と捉えられ、否定的に見られていた。¹⁴小説家を目指すならば、既存の商業作家の弟子となるか、同人誌に参加する等して、師の仲介を得たり、同人誌に発表したテキストが商業誌編集者の目にとまって声をかけられる、といったチャンスが巡ってくるのを待つのが正攻法と考えられていた時代だったのである。

このような状況では、小説家を目指すのは非常に困難であったことは想像に難くない。後に、昭和初年ごろから、総合雑誌『改造』や『中央公論』が純文学テキストを公募し始めたあたりから

ら、徐々に「文学懸賞」の認知度と評価は高まっていくことになるが、対象が大衆文芸となると、その評価も簡単には上向かなかったことだろう。故に「文学賞」「文学懸賞」の歴史の中で、『サンデー毎日』大衆文芸募集もまたあまり評価を受けてこなかったのである。

しかし、回を追うごとに『サンデー毎日』大衆文芸募集への投稿数は増えていった。辻平一は、「応募作品は三千、四千編を越えることがあった」と述べており、¹⁵ また川口のまとめたデータでも、それが裏付けられている。¹⁶ 賞金額の大きさの影響ももちろんあるだろうが、『サンデー毎日』という大部数の雑誌メディアに自分のテキストが掲載されることや、コネクションに頼らずに小説家を目指せる装置としての役割に投稿者は意義を見だしていたのだろう。「『サンデー毎日』大衆文芸募集」の当選者からは、後に著名な大衆文芸作家となった人々を多数登場しているが、同時に、後に純文学作家となった人物も含まれている。最も著名なのは、20世紀後半にしばしばノーベル賞候補になっているとも噂された¹⁷ 井上靖である。井上は「沢木信乃」の筆名で、1933年の第13回に佳作（「三原山晴天」）、1934年の第14回に入選（「初恋物語」）、1935年の第17回に入選している（「紅荘の悪魔たち」このときは「井上靖」名義）。¹⁸ 「文学懸賞」の機会が限られていた時代、目指す小説分野にこだわらず、小説家として登場する手段として『サンデー毎日』大衆文芸募集」が利用されていたことがうかがえる。

同時に、井上の事例に限らず、『サンデー毎日』大衆文芸募集」は、同じ投稿者が複数回入選・佳作をくり返すことがしばしばあった。¹⁹ このことは、ここでの入選・佳作が「小説家デビュー」に直結していなかったことも意味する。

1928年開始の『改造』懸賞創作、1933年開始の『文芸』懸賞創作、1934年開始の『中央公論』原稿募集などは、一度入選・当選した人物が再び入選・当選するという事例はなかった。それはつまり、一度入選・当選を果たしたら、その時点で新人の商業作家として認められたからであろう。

一方で『サンデー毎日』大衆文芸募集」が同一人物の複数回の入選・佳作を認めていた事実は、入選・佳作はそれだけでは商業作家としては認められなかったことを示している。「『サンデー毎日』大衆文芸募集」は、プロを目指すアマチュアによる「習作発表の場」である、という明治期以降の「文学懸賞」的性格を強く残していたのである。

繰り返しの入選・佳作を認めることで、投稿者の技量が鍛えられていくことは当然期待できただろう。それは『サンデー毎日』大衆文芸募集」から数多くの著名作家が登場したことが証明している。しかし、それだけに、『サンデー毎日』大衆文芸募集」は本格的な商業作家デビューの場とはならなかったことになる。「『サンデー毎日』大衆文芸募集」は、習作発表の場としての「文学懸賞」と、作家デビューの出発点としての「文学賞」の端境にあったと言える存在だったのである。

2. 千葉亀雄賞の登場

『サンデー毎日』大衆文芸募集は、小説家を目指す人々にとって数少ない投稿先であったが、前述の通り、1928年に総合誌『改造』が創刊十周年記念企画として開始した『改造』懸賞創作が、そのまま年一回の恒例企画となったあたりから、総合誌、文芸誌による公募型新人文学賞が増え始めた。そして、「文学懸賞」が「文学賞」へと変化する決定的な賞が1935年に登場する。いうまでもなく、日本文学振興会主催の芥川龍之介賞と直木三十五賞である。

芥川賞と直木賞は、昭和戦前期における「文学懸賞」「文学賞」の中では後発と言える。しかし、後から登場しただけに、先行する企画の長所を取り入れ、短所を排除する巧みな設定となっていた。その最たる特徴が、「既発表テキストから選考する」点である。

これまでの「文学懸賞」「文学賞」が公募型、つまり未発表原稿を投稿させ、それを各出版社・新聞社の編集部で選考するという仕組みだったのに対して、芥川賞と直木賞は、商業雑誌、同人誌問わず発表済みのテキストから選び出すという仕組みになった（最初期は公募も受け付けると表明していたが、それはすぐに取りやめられた）。

この仕組みが優れていたのは、同人誌活動を継続しながら受賞を目指すことが可能という点である。

公募型新人賞の場合、投稿できるのは未発表原稿に限られる。そして投稿した原稿は、原則として返却されない。コピーなどできない時代、投稿する前に手ずから複製を作っておかなければ、落選後そのテキストは失われてしまうことになる。これは投稿者にとって非常に大きな負担となる。

そして、未発表原稿を投稿するという仕組みだと、同人誌活動との並行においても負担になる。公募型新人賞入選を目指す投稿者ならば、渾身のテキストは同人誌ではなく投稿に回してしまうだろう。そうなれば、同人誌活動への参加意識が低くならざるを得ない。投稿者の中には、落選後に、おそらくは手元に残していた「複製」を同人誌に発表する人々もしばしばいた。²⁰しかし落選したテキストを載せることが、小説家としてデビューすることに繋がることはまずなかった。

それが、芥川賞と直木賞の仕組みによれば、積極的に同人誌に発表する行為それ自体が、賞の受賞につながっていくことになる。これは同人誌活動を活発化させることにもつながる。文学活動の裾野を広げ、レベルの底上げにも繋がっていくことになる。そして、多くの作家志望者が、芥川賞と直木賞を目指すことになっていくのである。

事実として、芥川賞と直木賞の登場から数年で、先に挙げた『改造』懸賞創作、『文芸』懸賞創作、『中央公論』原稿募集は中断（事実上廃止）している。その全てが芥川賞と直木賞の影響ではないのかもしれないが、この両賞は着実に「文学賞」としての存在感を増し、権威化して行くのである。

このような状況下で、『サンデー毎日』大衆文芸募集は、特段の変化もなく継続していた。その点からもこの賞が「習作発表の場」的性格が強かったことが表れている。『サンデー毎日』大衆文芸募集は、大衆文芸を対象とした直木賞と競合する存在ではなかったのである。

その『サンデー毎日』が、1936年に創設したのが千葉亀雄賞であった。

前述の通り、千葉亀雄はもともと「『サンデー毎日』大衆文芸募集」の選考担当者であり、辻平一によれば、時に数千に及んだ投稿作をほぼ一人で読み、選び出していたという。

この募集から千葉さんがなくなれるまで、選考は千葉さんの手にかかったものだった。応募作品が三千、四千編を越えることがあった。これを千葉さんがひとりで処理するのだから、壮観といってもよかった。小さなアリが大きな堤をくずすようにと形容した人もあった。(略)

もちろん、いつも選者は千葉さんひとりで、四千編以上の応募作が山と積まれても、手一つつけさせなかった。ただ、応募作品が大阪から東京へ大きな包みとして送ってくるのを(そのころ編集の本部は大阪にあった)部屋のすみに保管しておいて、一つの包みが終ると、次の包みの包装をといて、千葉さんの机の横に積み上げるだけが、私たちの仕事だった。²¹

このような超人的な千葉の働きによって初期の「『サンデー毎日』大衆文芸募集」は実施されていたが、千葉の死後に一時期この仕事を引き継いだ木村毅は、「これはご免だ。こんなことをしていると、千葉さんのように早死するよ」と言って二、三年で辞退し、その後は編集部で選考、採点して合議制で当落を決定するようになったという。²² 相当な激務であったことは容易に想像できるだろう。

千葉亀雄は『サンデー毎日』のメインコンテンツである大衆文芸の維持と発展に尽力していた。また千葉は文芸評論家としても著名であり、1924年創刊の文芸誌『文芸時代』における横光利一や川端康成等の新しい文学的表現から、彼らを「新感覚派」と呼んだことでも文学史上に名を残している。『サンデー毎日』にとって、最大の功労者の一人であり、故に死の直後にその名を冠した賞が設定されたのである。

ただ、千葉亀雄賞が千葉亀雄の顕彰だけを目的に創設されたとは言い切れない。ここでやはり想起されるのは、芥川賞と直木賞である。この二つの賞が独創的な特徴を持っていることは先に述べたが、もう一つの特徴は、死去した作家の名前を冠した賞という点にある。それまでの賞は、雑誌や新聞の名前がついたものがほとんどであり、個人名をつけたものはほぼなかった。作家個人の名前を冠した文学賞というのは、20世紀後半には珍しいものではなくなっていたが、この時点の日本では非常に特異だったのである。²³

そして千葉賞は、前年の1935年にできたばかりの芥川賞と直木賞の命名法を踏襲していた。亡くなったばかりの功労者の名前をつけた賞を設定するというのは、「模倣」であるとも言えるだろう。芥川賞と直木賞がまずまずの成功をしていた当時、特に直木賞という大衆文芸を対象とした賞が「文学懸賞」から「文学賞」になろうとしていた状況で、『サンデー毎日』は、日本の大衆文芸発展を支えてきたメディアとして、自らも懸賞ではなく、習作発表の場でもない、「文学賞」を持ちたくなかったのではないだろうか。

それは、千葉賞が発表された際の告知文にも表れている。「『サンデー毎日』大衆文芸募集」の

告知が「あっさり」していたのと比べ、千葉賞のそれは非常に厳かであり、つまり仰々しいものとなっていた。やや長くなるが、ここに引用する。

創刊第十五年の新春を迎えるに当り、本誌ではこゝに千葉賞制定『長篇大衆文芸』を懸賞募集する。想ふに大衆文芸が我が文壇の一角に台頭して新たなる分野を開拓してより既に十数年、幾多の新人、中堅、大家の輩出によるその一新一歩は、実に本誌の躍進発展と絶えず歩調を共にして来つたというも過言ではない。殊に、二十回を重ねんとする恒例『新作大衆文芸』募集を通じて、本誌が従来我が大衆文壇に送り出し、また現在送り出しつゝある新人作家群の清新澀刺たる筆陣に想到する時、何人も、それらの上を覆い尽す“大衆文学のゴッドファーザー”故千葉亀雄氏の、大いなる投影を忘却することは出来ない。千葉氏は大正十五年二月本社に入社して以来、我が文壇に於ける一指導力として絶えず海外文学の翻訳紹介に努めると同時に、また文芸及び社会評論家として旺盛なる活動を持続する一方、晩年に及んでは畢生の事業として、本誌の『新作大衆文芸』募集審査に専念しつゝ、我が大衆文壇の現在及び将来のために、新人を掘り、掘り、掘り起し続けた開墾者であつた。

昨年十月不幸病を得て没せらるゝや、本誌では、本誌の我が大衆文壇と千葉氏に繋がる縁の浅からざるを想ひ、この大衆文壇の一大恩人の業績を長く記念するために種々計画するところあつたが、ここに千葉賞を制定、本誌連載用長篇大衆文芸の懸賞募集を大々的に行ふことに決定し、その審査を、千葉氏生前に縁故の深かつた菊池寛、吉川英治、大佛次郎三氏に依頼して既に快諾を得た。幸ひに、下記募集規定厳守の上、大衆文芸道に志す新人諸君に奮起を希ふ次第である。

昭和十一年一月

サンデー毎日²⁴

この文章からは、やはり大衆文芸を発展させてきたのは『サンデー毎日』である、というプライドの高さが見て取れる。そして、明確に「連載用」の長篇を募集しているという点で、「習作」ではない、プロとしての原稿を求めている姿勢もうかがえる。選考委員を外部から招いている点も重要で、この三人は全員当時の直木賞選考委員であり、菊池寛は直木賞（と芥川賞）の主催者である。本格的な大衆文芸の「文学賞」を志向すると同時に、先行する直木賞の形式の多くを流用してもいたのである。その募集規定は、次のようになっていた。

募集規定

種類 時代物、現代物たるを問はず、たゞし作品は必ず作者の創作たること、翻訳翻案は採らず。

枚数 四百時詰原稿用紙百六十枚乃至百八十枚以内、たゞし本誌連載用として、約二十枚を一回分とし、分割掲載し得るやうに考慮されたし。

入選 時代物、現代物各二篇

入選第一席「千葉亀雄賞」並に賞金一千円宛

入選第二席「千葉亀雄賞」並に賞金五百円宛

選者 菊池寛氏吉川英治氏大佛次郎氏（順不同）

送先 大阪市北区堂島大阪毎日新聞社「サンデー毎日」編集部「長篇大衆文芸」係宛

締切 昭和十一年四月三十日

発表 昭和十一年八月中の本誌上

匿名 紙上発表の匿名は差支へなし、たゞし封筒および原稿第一頁には必ず住所本名明記のこと

版權 入選作品の出版権、上映権および映画撮影権は本社に帰す

返却 応募書類は一切返却せず

注意 応募原稿はバラバラにならぬように必ず綴ること、なほ本規定に關しての照会には一切回答せず、ご了承を願ふ。

賞金額は「『サンデー毎日』大衆文芸募集」の二倍で、週刊誌連載に適した形式のテキストを求めている、版權、映像化や上映の権利まで意識している点からも、『サンデー毎日』がこの賞への応募作により高い質とプロ意識を要求していることがわかる。

ただ、直木賞（と芥川賞）の最大の特徴である「既発表テキスト」からの選考、というやり方は採用できていない。直木賞（と芥川賞）が企画主体の『文藝春秋』の性格的に、新人作家の発掘とそのイベント性を重視すればいいのに対して、『サンデー毎日』はテキスト自体の新規性も重要だった。週刊誌での連載で、たとえ同人誌であっても、他のメディアで発表済みのテキストを新作であるかのように掲載することは出来なかったのだろう。

告知文の「大衆文壇の一大恩人の業績を長く記念するため」という表現や、菊池寛をはじめとする外部選考委員の招聘、細かい投稿規定などを見ても、ある程度継続的に千葉賞を募集する意図が見て取れる。

しかし、結果から言うと、この千葉亀雄賞は『サンデー毎日』の恒例企画にはならなかった。川口によれば、戦前の千葉賞は1936年に第一回を実施した後は、1939年に第二回のみで終わっているのである（戦後1949年に3回目を実施）。ただ、この間『サンデー毎日』が何もしなかったわけではなく、むしろ逆で、1937年に「創刊十五周年記念長篇」の募集をし、戦後も1955年に「大衆文芸30周年記念100万円懸賞」を行った。²⁵しかし、「千葉賞」という名称での募集継続はしなかった。「『サンデー毎日』大衆文芸募集」と並行しての長篇選考が困難であったのかもしれないが、²⁶これだけ大々的に、しかも「一大恩人」「ゴッドファーザー」とまで讃えた千葉の名前を冠した賞の扱いとしては、ぞんざいな印象が拭えない。逆にいうと、それだけ「文学賞」

の運営・継続というのは難しいものであるということを、千葉賞は示しているとも言えるだろう。

3. 第一回千葉亀雄賞受賞者とテキストについて

継続性がなかった千葉賞ではあるが、第一回は『サンデー毎日』のイベントだけに投稿も集まっていた。入選作が発表された『サンデー毎日』1936年8月2日号は、以下の様にその盛大さを喧伝している。

本誌が一度千葉賞“長篇大衆文芸”懸賞募集を発表するや、一般読書界はもちろん、文壇もまた、この文芸の建設援護に貢献するところ甚大であった千葉氏の記念として、絶好のものとして、これを歓呼して迎へた。

自來半年、新進作家の名篇集まること、実に九百二十五篇、本誌の編集スタッフにおいて、嚴重な予選を行つた上、選者菊池寛、吉川英治、大佛次郎三氏の審査を乞ひ、こゝに漸くその成果を発表するの機に到達した。

殊に編集を感激せしめて措かなかつたことは、従來多年、千葉氏の薫陶の下にあつた本誌大衆文芸入選者の定連諸家が、挙つて力作を寄せられたことで、しかもそれらが大部分優秀作であつたことは、個人も地下に定めて会心の微笑をもらすことであらう。

ここで注目したいのは、応募者、優秀作の多くが「千葉氏の薫陶の下」にあつた「定連諸家」つまり入選（または佳作）をくり返している常連投稿者であつたという点である。これは、良い意味で見れば、『『サンデー毎日』大衆文芸募集』の投稿者のレベル、力量が非常に高いことを意味しているが、悪い意味で見れば、新規性のある投稿がなかったことを表してもいるだろう。千葉賞が長続きしなかつたのは、この点も影響したのかもしれない。投稿規定が「長篇」になつただけで、投稿者・入選（佳作）者があまり代わり映えしないのならば、負担を増やして新しい賞を運営する意味はあまりなかつたはずだ。それならば「習作の場」として短編を繰り返し募集する中から、連載に耐える作家を見いだしていった方が効率がいい。実際、そのようにして、すでに『『サンデー毎日』大衆文芸募集』出身の大衆文芸作家は輩出されていたのだから。

『『サンデー毎日』大衆文芸募集』に毎回数千篇の投稿が集まっていた、その「定連」＝常連投稿者が数多く応募していたのならば、募集開始から締切まで四ヶ月しかない公募でも九百超の投稿があつておかしくはなかつただろう。しかしそれでは、新規性のあるテキストや作家を見いだすことは難しい。千葉賞の選考では、おそらくその点も考慮されたのではないだろうか。なぜなら、第一回の入選者に顔ぶれば、まるでそれが表れているかのように、「定連」＝常連投稿者と「新人」とに分かれていたからだ。

前述の通り、千葉亀雄賞は「現代物」と「時代物」それぞれに第一席・第二席が用意されており、計四名に賞が贈られる。第一回千葉賞の受賞者は、以下の四名であつた。

【現代物】

第一席 金聖珉 「半島の芸術家たち」

第二席 高円寺文雄 「野獣の乾杯」

【時代物】

第一席 井上靖 「流転」

第二席 田中平六 「天鼓」

「時代物」の第一席・井上靖は前述の通りで、「現代物」第二席の高円寺文雄は「川奈寛」の筆名で「『サンデー毎日』大衆文芸募集」に入選1回、佳作1回入った経験があった。一方、「現代物」第一席の金聖珉と「時代物」第二席の田中平六は、これが初めての『サンデー毎日』での受賞であった。²⁷ 計ったかのような「定連」＝常連投稿者と「新人」が二人ずつという結果は、千葉亀雄賞という新しい「文学賞」を運営する上での『サンデー毎日』の強みと弱みがはっきり見えるものになっていた。『サンデー毎日』がテキストを募集する場合、「定連」＝常連投稿者の存在は非常に大きく、その支柱にもなっている。しかし、それに頼る限り、このコンテンツにおける新規性や発展性はあまり望めないからである。

第一回千葉賞において、特に目を引くのは、「現代物」第一席に殖民地であった朝鮮半島出身者の金聖珉を選んだ点である。

1936年当時、日本の中央文壇で商業作家として活躍できていた殖民地出身作家は、1932年の第五回『改造』懸賞創作に二等当選し作家デビューを果たした張赫宙だけだった。昭和に入って、朝鮮半島や台湾では殖民地統治下の学校教育で日本語を学んだ人々が青年期を迎えはじめた。そしてその青年たちの中から、日本語による文学活動を開始する人々が登場していた。これらの人々にとって、公募型の「文学懸賞」はコネクションや東京等の日本本土への移動をしなくとも作家デビューを目指すことのできる重要な手段となっていた。²⁸ ただ、それでも社会の中で公然と差別される殖民地から、日本の文壇で商業作家として十分に活動できるだけの作家が登場するのは難しいことだった。

このような状況下で、「純文学」ではなく、大衆文芸を描く殖民地出身の書き手が登場したことは、非常に驚くべきことだった。張赫宙にしても、少なくとも活動の初期においては「殖民地出身」という物珍しさや、あまりよく知らない殖民地の現状、文化、習慣を日本語で紹介できる作家、という枠組みで評価される側面があったからである。しかし、大衆文芸では、そのような知的関心よりも娯楽性が重視されたはずであり、その意味で殖民地出身者が参入するハードルは高くなる。この状況下で、大衆文芸の中心的メディアである『サンデー毎日』の選考を金聖珉は乗り越えていたのである。²⁹

入選した際の金聖珉の「作者紹介」は次のように書かれている。

現代物第一席入選の金聖珉氏は本名金萬益、二十二歳。平壤に生れて平壤高等普通学校中

途退学、雄図を抱いて上京したこともあるが、志破れて平壤に帰り、同志を集めて朝鮮映画制作にたづさはること一年余、後解散して現在では満浦線北新岬駅に勤務。作者は語る。

「わたしの作品が入選するとは夢にも思っていませんでした。題材に類想が少ないため選ばれたことだらうと思つてゐますが、何しろ締切に迫られながら書いたため、完全に推敲することも出来ず、むらの多いものをそのまま出してしまつたのです。

現在の職に就く前に、朝鮮映画の脚本を書いてゐた関係上、映画界およびレコード界に知合が多く、彼らの生活を小説家して見ようとふと考へて、昨年から別に投稿などするといふ考へもなしに、筆を下ろしたのがこの作品です。何しろ素材が素材だけに、筆とうまく融け合ふかといふのが疑問でいろいろ苦心しました。それだけに無理をした個所もあり、また事情を知つてゐる人が読めば誤謬だと直に気づくやうな点があるのも、知つてゐながらどうすることも出来ず、そのままにして置いたのです。これは近ごろ諺文小説に転向した張赫宙氏によつてでも、明かに示されてゐる殖民地小説を書くもの、悩みでせう。

が、この種の小説は張赫宙氏が純粹小説にいくらか紹介してゐるのみで、大衆小説には今まで殆ど影を見せてゐません。そこを狙つたといへば大げさですが、まあ、一般大衆に、もう少し朝鮮というものを認識させる上において、これはぜひかうした素材を採りあげるのが至当だと思ひ、拙ない筆を追つて立てつゝ書き綴つて見たわけなのです。(後略)

金聖珉の「作者紹介」は他の三名と比べてかなり長い。井上靖や高円寺文雄は「定連」=常連投稿者であるからだとしても、同じく「新人」の田中平六と比べても詳細に自己を語るだけの紙幅を与えられている。やはり『サンデー毎日』も、殖民地出身の非ネイティブ入選者を「特別視」していることが明らかにわかる。

金聖珉もやはり、殖民地出身者として、自らの出自や経験が日本の中央文壇の価値観において「特異性」を持つことを意識して投稿してきたことを明らかにしている。そして、張赫宙の名前を挙げつつ、金聖珉が張赫宙もまた殖民地の「特異性」を描くことによって成功したとみなして、自分は大衆文芸の分野で「特異性」を活かそうと意図して投稿したと述べている。これは、殖民地出身の作家が中央文壇で評価される際の典型的なパターンであり、金聖珉はそれを戦略的にやってのけたということになる。

このような大衆文芸における金聖珉の戦略性は、あるいは意識的なものではなく、無自覚に行われたものなのかもしれない。殖民地出身者が中央文壇で評価されたい、と考える際に取り得る方策は、日本側の差別感情や対殖民地認識の乏しさのために、かなり限られてくるからである。そのような点について、南富鎮は次のように述べている。

金聖珉の日本語小説には大衆風俗として、内鮮人の恋愛と結婚が頻繁に取り扱われている。そしてまたそれが、戦時期の国策的な素材と同居している。大衆風俗小説の中に国策的な要素を加味するのは、金聖珉特有のものではなく、戦時期に流行した日本の大衆小説にも共通

するものである。(略)それは一見して偽装国策のように思われるほど、国策の時代精神とは全く相容れないものである。日本語で書いた朝鮮人作家の膨大な国策的な作品とは全く異質的な雰囲気は、こうした大衆小説の側面から由来するものと思われる。そこには思想性が最初から欠如しているのである。

(略)

一方で、金聖珉のこうした無自覚な大衆性によって日本語へ傾斜する朝鮮人の内面が率直に覗かれている。思想性と倫理性を装うことなく、日本語へ傾斜する内面心理がむき出しに表れているのである。そうした日本語への欲望が大衆的な風俗性として盛り込まれている。

(略)こうした無自覚な大衆性によって投げ出された日本語への欲望こそ、もしかすると最も普遍的な植民地的現実だったかもしれない。³⁰

張赫宙のように「純文学」を志向する作家のテキストには、何らかの「思想性」や「倫理性」がテキストの表現を束縛する。そのため、日本の国策に同調する内容を描いているとしても、朝鮮の人々が朝鮮文化や朝鮮語を否定して、日本文化、日本語を無条件に歓迎し受容する姿を描くことが難しい。このような人物やその内面を描く際には、民族的出自や母語を切り離す際の苦しみや葛藤、摩擦も必ず描かれ、それを克服する、というストーリーが盛り込まれがちになる。それに対して、金聖珉はそのような朝鮮半島出身の青年を描くことに躊躇がない。それは大衆文芸だからだ、という南富鎮の指摘には、ここでも首肯せざるを得ない。そして、そのように躊躇なく描けてしまうからこそ、民族的出自や母語を迷いなく切り捨てる姿の描写が露悪的に過ぎて、逆説的に「国策」を批判しているかのようにも見えてしまう。まさに「偽装国策」のように。

金聖珉「半島の芸術家たち」は『サンデー毎日』で連載され、その後金聖珉は『緑旗連盟』（羽田書店 1940年）、『恵運物語』（新元社 1941年）の長編小説の単行本を出版し、また朝鮮半島の雑誌『緑旗』や『太陽』に小説連載を行ったりしていた。³¹そして、「半島の芸術家たち」は、「半島の春」というタイトルで映画化もされている（1941年）。

このように大衆文芸、大衆文化の分野で、日本語を用いて活発な活動をした金聖珉であったが、日本敗戦後、その点によって批判や非難を受けた形跡は見つからなかった。前述の張赫宙が戦後に「親日作家」として、長らく批判を浴び続けていたことと対照的である。³²

『サンデー毎日』が第一回千葉賞において、朝鮮半島出身者とそのテキストを第一席に選び、日本の領域内に広く紹介し、作家として推しだしたことの意義は非常に大きい。しかし、発行部数などから考えても多くの人々の目に触れ、読まれたはずの金聖珉の知名度は、他の朝鮮半島出身作家達と比べても、低いまだだった。ここに、『サンデー毎日』というメディアの特性が影響し、また顕著にそれが表れているとも言える。週刊誌は発行サイクルが短く、古い物は次々に読み捨てられ、忘れられていく。また、戦前の週刊誌の立ち位置が、総合誌や文芸誌のような成人男性中心の「高級」なものではなく、女性や子供への「知的啓蒙」に偏る傾向にあった。³³大衆文芸が主力コンテンツであったのも、まさに週刊誌がそのような性格のメディアだったからである。

あるいは、先駆的な週刊誌である『サンデー毎日』がそのような性格を週刊誌に付与してしまったのかもしれないが。

結果的に、入選者として最も大きく取り上げられた金聖珉はその後『サンデー毎日』誌上では活動の機会がなかった。井上靖も戦前のこの時点ではまだ作家として立たず、千葉賞受賞をきっかけとして、毎日新聞社に入社するという変わった進路に進んだ。³⁴ 高円寺文雄もその後『サンデー毎日』に登場しなかったが、戦後は川奈寛名義で推理小説を数多く発表した。³⁵

田中平六もまた、ユニークな作家となった。入選当時東京市庁に勤務していた田中は入選後、筆名を「沙羅双樹」に改め、「『サンデー毎日』大衆文芸募集」を中心に投稿を繰り返した。そして1938年に『サンデー毎日』に掲載された「兜町」で第8回（1938年下半期）の直木賞候補となる。³⁶ これは落選したが、「兜町」は菊池寛に非常に高く評価されたという。³⁷ 田中平六改め沙羅双樹はこののち兜町を舞台とした株式投資を描いたいわゆる経済小説の先駆的テキストを次々に発表し、また戦後になってからは小説家業と並行して投資評論家としても活動、息の長い作家となった。

おわりに

先に述べたとおり、千葉亀雄賞は創設当時の告知とは裏腹に、定期的な賞イベントにはならず、戦前ではこの後1938年に第二回を実施しただけで終わってしまった。21世紀現在の視点でみると、第一回の結果は金聖珉という殖民地出身者を選び出したこと、そして戦後を代表する作家の一人である井上靖に賞を与えたことに意義を見いだすことができるだろう。

しかし、同時代においては、大々的に企画したにもかかわらず、大衆文芸の発展や『サンデー毎日』の宣伝といった役割を担う存在にはなれず、消えていった泡沫的な賞イベントのひとつであった。「『サンデー毎日』大衆文芸募集」が中断期間も含め1926年から1959年という非常に長期間にわたって継続実施されたことと比べると、非常に奇妙にも見える。「文学懸賞」「文学賞」を継続実施するだけの財政的基盤やノウハウは十分にあったはずの『サンデー毎日』が、なぜ賞イベント運営に「失敗」したのだろうか。

このことは、「文学懸賞」「文学賞」というイベントが、本来的に利益の少ないものであることを表しているのだろう。前述の通り、『サンデー毎日』だけでなく、『改造』も『文芸』も『中央公論』も、戦前においては長期にわたる「文学懸賞」「文学賞」運営には失敗している。文芸出版社として老舗である新潮社も、芥川賞と直木賞に対抗するかのような「文学賞」を何度も創設しては廃止し、新たな賞を創り直している。つまり、芥川賞と直木賞が失敗せずに継続していることの方が異常事態とみた方が良いのだろう。また、別の側面で見れば、「文学賞」という権威を継続させるには独占状態が必要なかもしれない。20世紀後半から2023年現在に至るまで、日本国内の文学賞の権威は芥川賞と直木賞に集中している。その他の文学賞は、公募型新人賞を含め、芥川賞、直木賞にたどり着くまでのステップアップの場のようになっているのが現状であるからだ。

戦前において、『サンデー毎日』が大衆文芸を主力分野として、作家の発掘や紙面提供という意味での育成に貢献したことは間違いない。その過程の中で、賞イベントがうまくいかなかった

ことは、それ自体は大きな問題ではない。ただ、ここで注目しておきたいのは、それにもかかわらず、新聞・雑誌メディアや作家志望者、そして読者の文学市場を共同体として参加している全ての人々が、定期的に賞イベントを欲し、それを生み出し、そして多くの場合それを廃棄する、ということをくり返すことの意味である。文学を芸術と見なす場合においても、娯楽と見なす場合においても、どちらの側も、賞イベントへの欲求は必ず立ち上がってくる。文学活動において、このように賞イベントが不可欠になっているのは——あるいは、「不可欠だと思い込んでしまっているのは」何故なのだろうか。大衆文芸という、快楽的な欲求により素直に向き合い、描き出している文学テクストを読むことは、賞イベントの意味をより深く理解することにつながられるのではないだろうか。

そのような意味で、『サンデー毎日』における大衆文芸の賞イベントを考えることには、大きな意義があると考えているのである。

※本稿は、科学研究費助成事業・基盤研究 C「〈大衆文学〉の新人文学賞に関する総合研究—『サンデー毎日』大衆文芸」を軸として」（研究代表者：和泉司、研究課題番号：18K00276）および基盤研究 C「戦前期『サンデー毎日』と大衆文化に関する総合的研究」（研究代表者：副田賢二、研究課題番号：17K02487）の成果である。

後注

- 1 「読物」「講談」「大衆文学」「大衆文芸」と様々な呼び方を提示したが、本稿においてはひとまず「大衆文芸」という表現を用いることにする。後述するように『サンデー毎日』が企画した文学懸賞名が「大衆文芸募集」となっているからであり、本稿が厳密な定義を行っているわけではない。
- 2 野村尚吾『週刊誌五十年』（毎日新聞社 1973年）による。本稿における『サンデー毎日』に関する事実関係の多くは同書、および『サンデー毎日』編集者であった辻平一の『文芸記者三十年』（毎日新聞社 1957年）に頼っている。
- 3 原卓史「白井喬二「新撰組」論——『サンデー毎日』から『現代大衆文学全集』へ」『近代文学合同研究会論集』第11号（2014年11月）および中村健「白井喬二「新撰組」と『サンデー毎日』の関係性の検証と意義」『出版研究』第42号（2012年3月）を参照。
- 4 副田賢二「〈前線〉に授与される〈文学〉と大衆文化——昭和戦時下における〈文学リテラシー〉の機能拡張——」『日本近代文学』第92集（2015年）を参照。
- 5 先駆的な研究成果として、山川恭子編集・黒古一夫監修『戦前期『サンデー毎日』総目次』上・中・下全3巻（ゆまに書房 2013年）がある。
- 6 研究代表者：副田賢二（防衛大学校）。本稿筆者も研究分担者として当該計画に参加した。計画に加えてくださった副田氏には深く感謝したい。また、副田氏は科研費による研究計画「1920～1950年代の週刊誌メディアにおける文学テクストと視覚表象の総合的研究」（研究課題番号：20K00361）が採択されており、『サンデー毎日』『週刊朝日』といった週刊誌メディアを中心とした研究を継続している。
- 7 主な発表媒体は、P.L.B. 名義で川口が運営しているサイト「直木賞のすべて」（<https://prizesworld.com/naoki/>）内のコンテンツである「直木賞のすべて 余聞と余分」（<https://naokiaward.cocolog-nifty.com/blog/>）である。また川口は同サイトの「文学賞の世界」（<https://prizesworld.com/prizes/>）というコンテンツにおいて、第1回から第55回までの「『サンデー毎日』大衆文芸募集」の全ての当選・佳作および選考委員等の情報を掲載している。本稿は同サイトの多くの知見と情報に頼って作成されている。

- 8 辻平一前掲『文芸記者三十年』の「千葉亀雄と大衆文芸」を参照。
- 9 川口前掲「直木賞のすべて 余聞と余分」の2021年9月19日付記事「辻平一（大阪毎日新聞）。新聞社から売れる週刊誌をつくり上げた大衆文芸界の偉人。」より引用。
- 10 野村前掲『週刊誌五十年』の「大衆文芸」の募集と千葉亀雄より引用。同書では「大衆文芸」という語を造語したのは白井喬二であるとしている。この点は副田賢二「〈前線／銃後〉の物語と「大衆文芸」の機能——戦前期『サンデー毎日』掲載の大庭さち子の小説を中心に」『山口国文』第43号（2020年3月）も参照した。
- 11 野村前掲書より引用。
- 12 岩瀬彰『月給百円』のサラリーマン—戦前日本の「平和」な生活』（講談社現代新書 2006年）を参照。
- 13 紅野謙介『投機としての文学』（新曜社 2003年）の「懸賞小説の時代」を参照。
- 14 和泉司『日本統治期台湾と帝国の〈文壇〉』（ひつじ書房 2012年）の「第二章 『改造』懸賞創作の行先——〈文壇〉と〈懸賞〉」を参照。
- 15 辻前掲書『文芸記者三十年』の「千葉亀雄と大衆文芸」を参照。
- 16 川口前掲サイト「文学賞の世界」の「『サンデー毎日』大衆文芸募集」を参照。
- 17 ノーベル財団が開示した1969年度のノーベル賞文学部門の候補者の中に、井上の名前があったことが確認されている。『朝日新聞』2020年1月21日付記事「井上靖、ノーベル賞候補だった 川端康成受賞翌年の1969年」を参照。
- 18 川口前掲サイト「文学賞の世界」の「『サンデー毎日』大衆文芸募集」を参照。
- 19 川口前掲サイト「文学賞の世界」の「『サンデー毎日』大衆文芸募集」を参照。
- 20 この事例で最も有名なのは、第1回芥川賞を受賞した石川達三「蒼氓」であろう。石川の「蒼氓」は、1934年7月発表の第7回『改造』懸賞創作に投稿されたテキストで、その年の「選外佳作」に名前だけが掲載されている。この「蒼氓」が、後に同人誌「星座」に掲載され、芥川賞候補から同賞受賞となった。
- 21 辻前掲書『文芸記者三十年』の「千葉亀雄と大衆文芸」を参照。
- 22 辻前掲書『文芸記者三十年』の「千葉亀雄と大衆文芸」を参照。
- 23 菊池寛は、いずれも故人の名を冠したフランスのゴンクール賞やノーベル賞を意識して芥川賞、直木賞の創設を発想したと言われている。永井龍男『芥川賞の研究』（日本ジャーナリスト専門学院出版部 1979年）を参照。
- 24 『サンデー毎日』1935年1月5日号「千葉賞制定『長篇大衆文芸』懸賞募集」より引用。ちなみに芥川賞と直木賞の制定発表は1935年1月で、新年号での発表という共通点が見受けられる。
- 25 川口前掲サイト「直木賞のすべて 余聞と余分」2011年2月13日付記事「千葉亀雄賞 人は死んでも功績は死なず。直木三十五と同じくらい、いやそれ以上の功労者、千葉亀雄よ永遠なれ。」を参照。また川口によれば、戦後の千葉賞は1949年から1955年まで6回「短編千葉賞」も開催し、「『サンデー毎日』大衆文芸募集」の入選作の中から一篇の受賞作を選んで賞を贈っていたという。
- 26 「『サンデー毎日』大衆文芸募集」が最初に募集していた百枚程度の原稿募集は、第2回目以降廃止され、基本的に五十枚程度の短編の募集のみになっていたことを考えると、短編の募集と選考を実施しつつ、恒例イベントとして長編の選考を並行して行うのはかなり難しかったのかもしれない。
- 27 川口前掲サイト「文学賞の世界」の「『サンデー毎日』大衆文芸募集」を参照。
- 28 和泉司前掲書の「第一章 日本統治期台湾における〈日本語文学〉の始まり」を参照。
- 29 一方、三人の外部選考委員たちの選評をみると、金聖珉と「半島の芸術家たち」に言及しているのは菊池寛だけで、吉川英治と大佛次郎は「時代物」入選作の井上靖「流転」と田中平六「天鼓」についてしか述べていない。この点から、「現代物」の選考は実質的に菊池寛一人の判断であった可能性が見えてくる（菊池寛は「現代物」第二席の高円寺文雄「野獣の乾杯」にも言及しているが、「時代物」については触れていない）。菊池寛の個人的な関心が、入選に影響したことも考えられるだろう。
- 30 南富鎮「日本女性と日本語に向かう欲望——金聖珉の日本語小説を軸にして——」（『人文論集』55号 2005年1月初出）。ここでは南富鎮『文学と植民地主義——近代朝鮮の風景と記憶』（世界思想社 2006年）収録の文章を参照した。
- 31 南富鎮前掲論文を参照。

- 32 例えば、戦前に日本支配に協力した作家達を調べ、批判的に論じた林鍾国『親日文学論』（原著は1966年出版。ここでは大村益夫訳（高麗書林 1976年）を参照した）では、張赫宙や同じく日本語作家として現在でも高い評価を得ている金史良は立項されているが、金聖珉は全く触れられていない。
- 33 野村前掲書を参照。
- 34 井上靖については、高木伸幸『井上靖の文学 一途で烈しい生の探求』（和泉書院 2022年）を参照した。
- 35 川口前掲サイト「文学賞の世界」の「『サンデー毎日』大衆文芸募集」を参照。
- 36 川口前掲サイト「文学賞の世界」の「『サンデー毎日』大衆文芸募集」および「直木賞のすべて」を参照。
- 37 辻平一前掲書の「作家寸描」を参照。この中で、辻は飲み会の席で菊池寛から沙羅双樹の「兜町」が非常によかったと言われ、なぜ「『サンデー毎日』大衆文芸募集」の入選作ではなく選外佳作なのか、落としたのはおかしい、と言われて困ったことを回想している。ちなみに本稿に書いたとおり、「兜町」は直木賞候補となりそこでも落選しているが、この直木賞選考には菊池寛は委員として参加している。川口則弘のサイト「候補作家の群像 第8回 沙羅双樹」の項目を参照。

